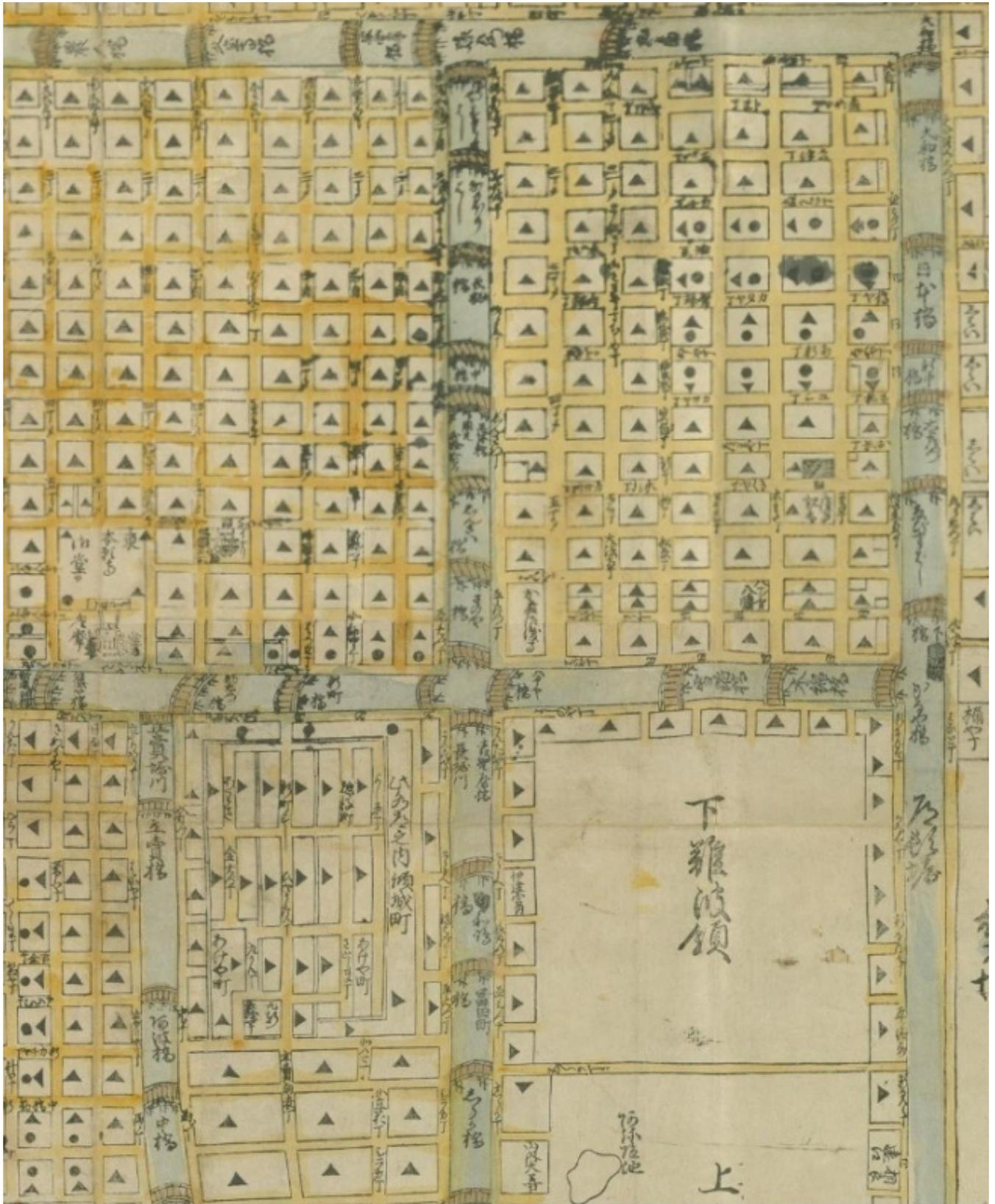


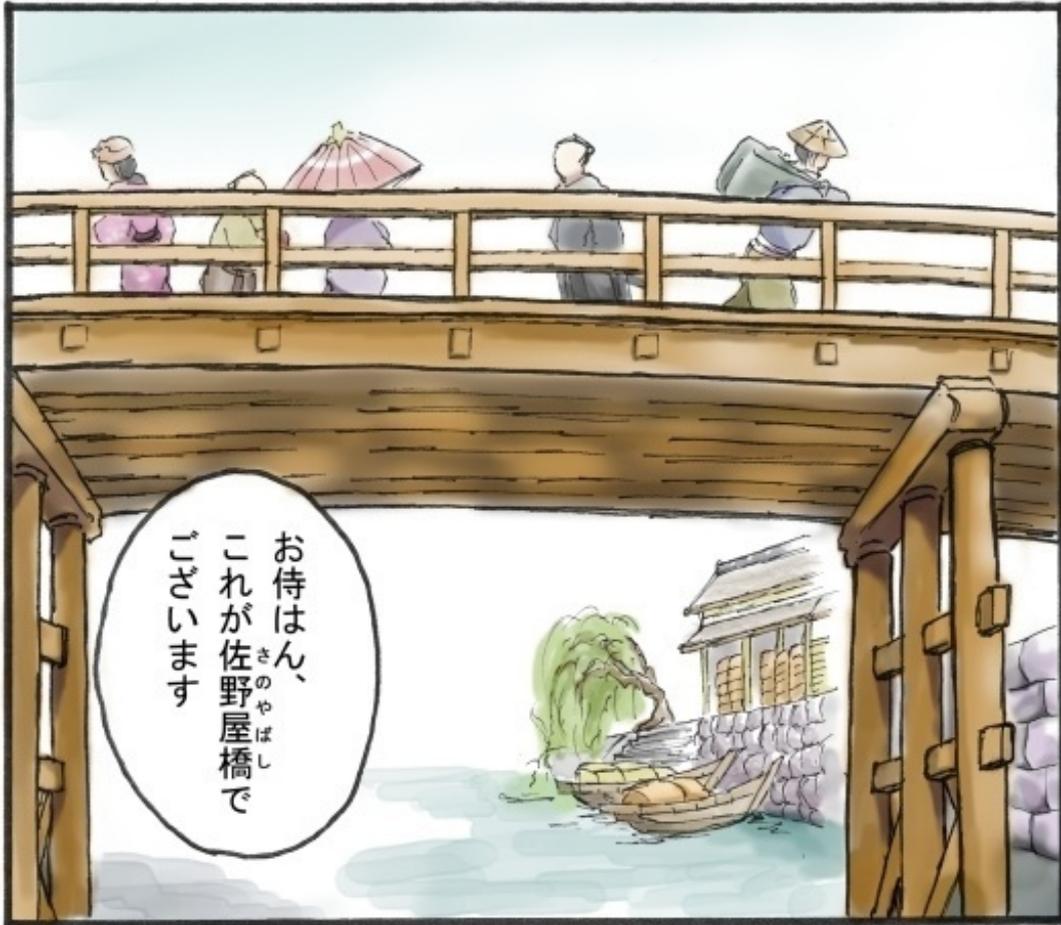


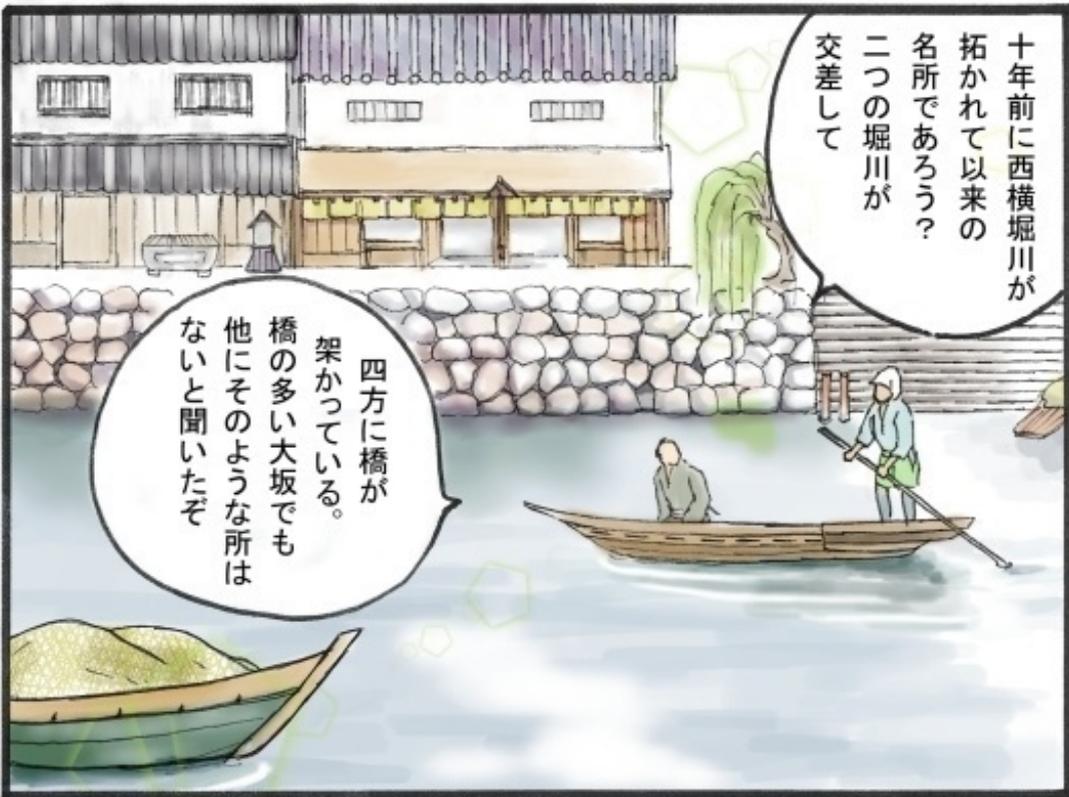
みずのみやご大坂
(一)四ツ橋

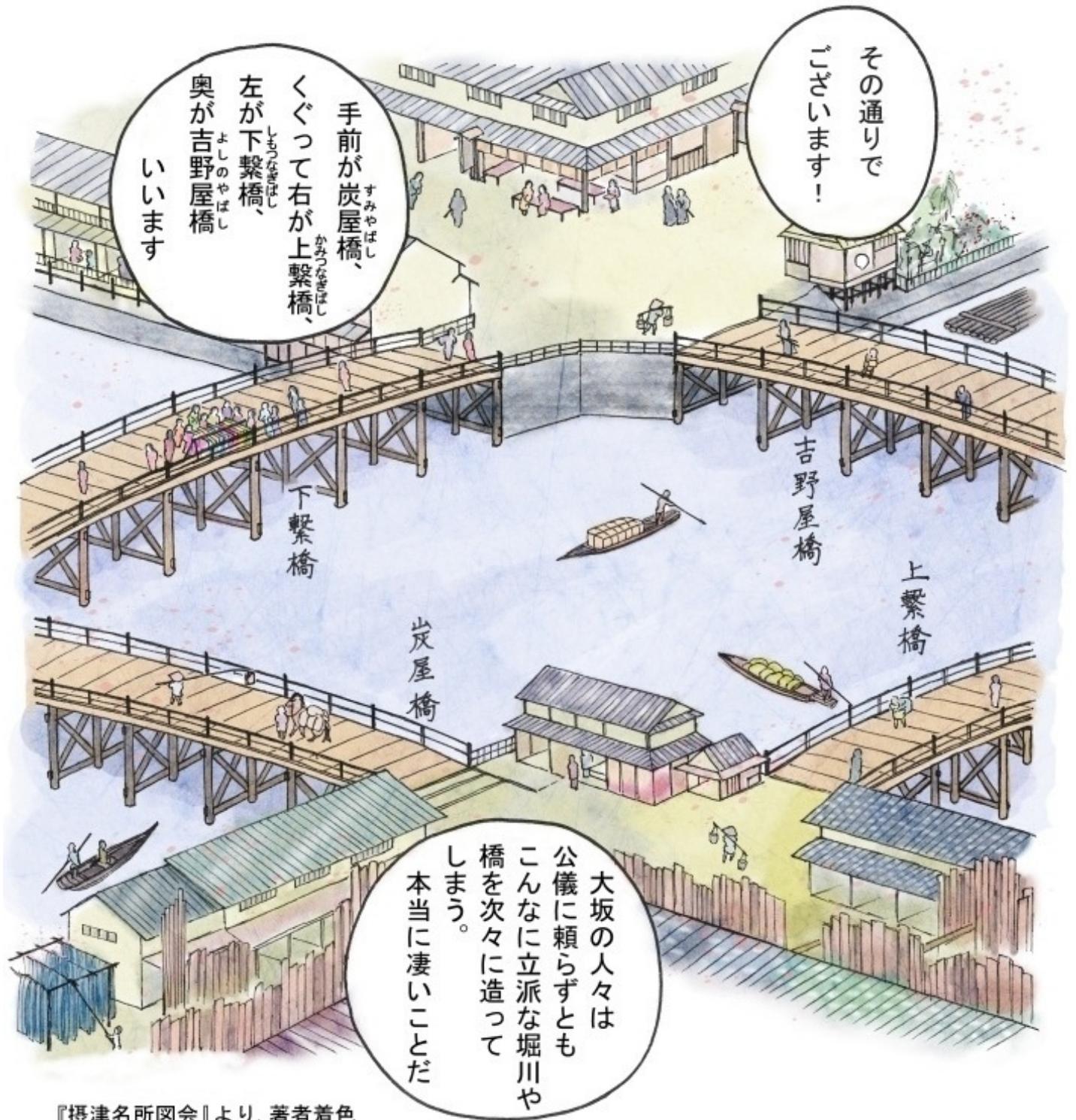


「大坂大絵図」(国立国会図書館蔵・元禄9 [1696]年)より

江戸初期の絵図に見える四ツ橋(中央)







『摂津名所図会』より、著者着色







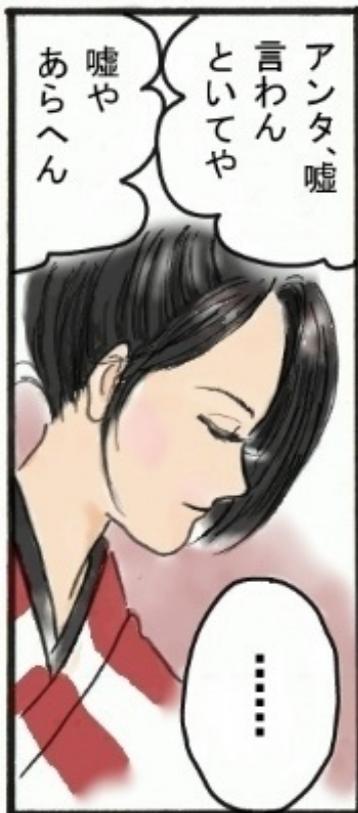
(一)古着
(二)武家や裕福な町人の妻













ウチはあの
お侍様にタダで
お売りしました
よつてに



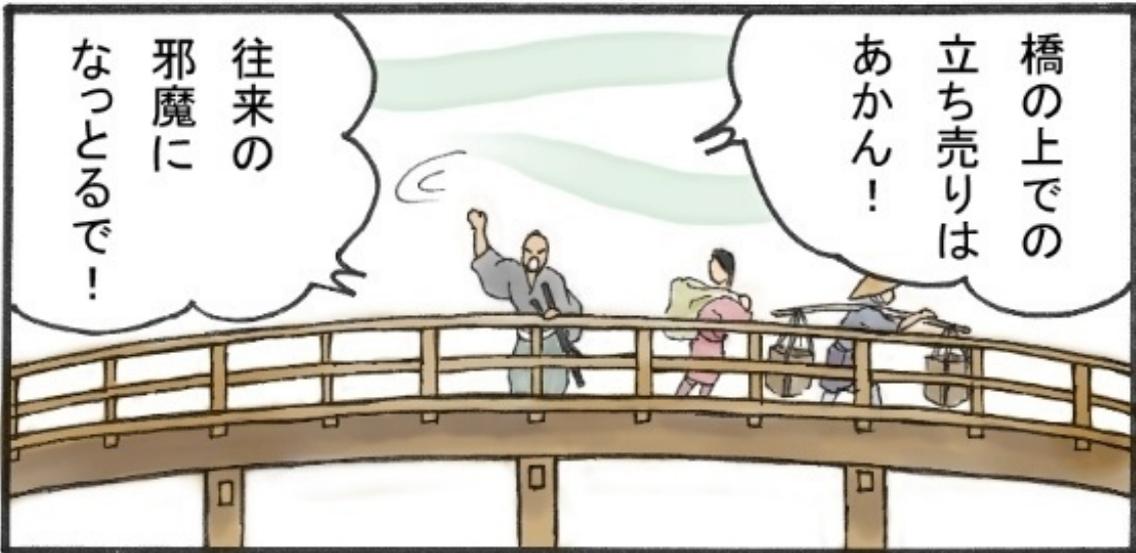








こらあ〜!!
その
下繫橋の
上の者ども
〜っ!!

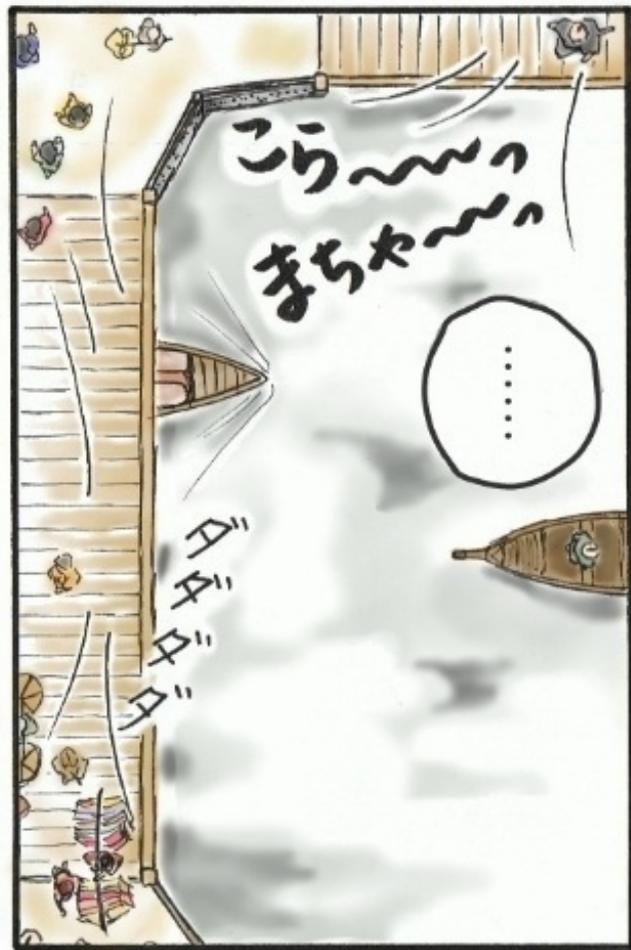


橋の上での
立ち売りは
あかん!

往來の
邪魔に
なっとるで!











(三) 武家の役職で書記・記録係

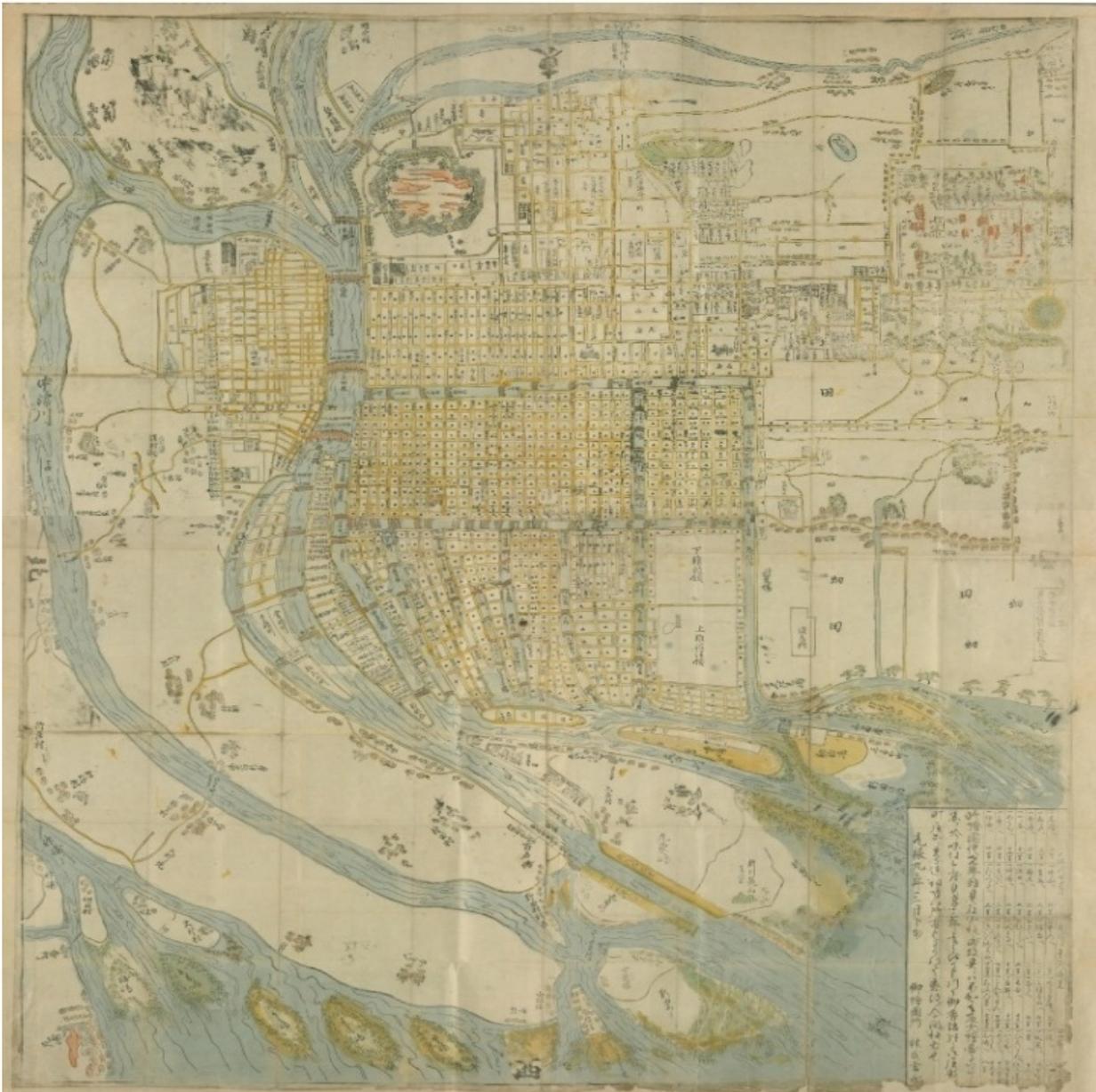
コラム1

近世随一の水都、大阪

～クリエイティブな町人たちの街～

大阪は明治以前「大坂」と書かれ、水路が縦横に走る美しい街でした。図1は元禄9年（1696年）に出版された「大坂大絵図」です。絵図とは今で言う地図のことですが、橋や建物が絵画的に描かれ、「絵図」という呼び名にふさわしいように感じます。またこの絵図の上側は東となっていてるところも現代の地図とは違います。大阪城のある東を上にしていたのでですね。

図1 大坂大絵図（1969年、国立国会図書館蔵）



これを見てわかる通り、大坂は本当に川の中の街とすることができます。

淀川の大きな流れが京の都、大坂そして海を結び、大規模な水上交通が可能だった上に、大小の水路が街の隅々まで行き渡っています。これらの水路によって、人や物の往来が円滑だったことが容易に想像できると思います。

大阪湾に諸国から大船で集まる物資が、小舟に積み替えられ、大阪市中の市や蔵屋敷、商家に運ばれていました。「天下の台所」と呼ばれるにふさわしい交通インフラが整っていたのですね。

しかし、残念ながら現在では市街中心部の堀川はほとんど残っていません。

図2 江戸時代の大坂中心部の堀川

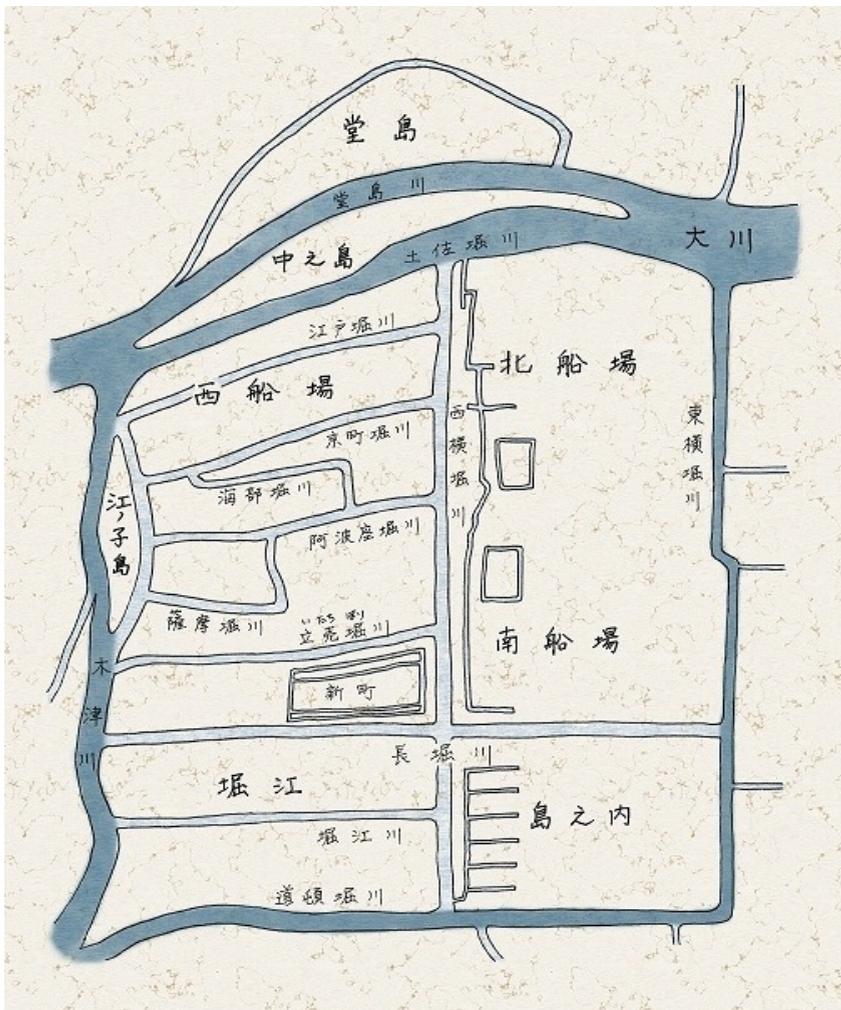


図2の水色が今はもう存在しないかつての堀川、水路です。

昭和の高度経済成長期に埋め立てられ、道路になりました。青色の川や堀川は現在の大阪にも残っているものです。

これらの堀川に架かっていた大小さまざまな橋は八百八橋と称され（実際は百余りでしたが）、江戸時代の大坂を特徴付けるものでした。私は、これらの橋と水辺の風景が、経済都市としての機能性のみならず、大坂を美しく文化の香りをも漂わせる街にしていたと思います。

よく大阪の街歩きをする私ですが、案内のネイティブ（大阪人）の方々と一緒にしばしば「一度でいいから江戸時代の大坂に行って、その素敵な風景を見てみたい」とため息をついています。

さて、今回は第一話ですので、どうして近世の大阪がこのように日本一の水都、商都として発展を遂げたのかを述べてみたいと思います。数多の歴史書や経済史で解説されていることですが、私はここでは3つの重要なポイントを挙げてみたいと思います。

天の恵み ー日本一の地の利ー

まず大阪の類まれな地形が「天下の台所」となる第一のポイントでした。鉄道や飛行機の無い時代、大量輸送の主役は水上交通でした。和船の発達と航路の開拓によって、馬を使う陸路よりもはるかに大量の物資をより早く運ぶことが出来たのです。

「時節にかなった順風は静かに吹き、船の日和を見る船長は海路に熟練していて、西国で、直径が一尺八寸にもなる嵐を呼び込む雲も、三日前から予測できるようになり、近頃は航海もまったく安全になったことである。世の中に船というものがあるからこそ、一日に百里を歩き、十日に千里の沖を走って、万物を自由にまかなえるのだ。そのために大商人の心は渡海の船にたとえられるのであり（以下略）」

井原西鶴の『日本永代蔵』の一節です。今日私たちが新幹線や飛行機に乗って「随分と便利になったものだなあ」と感心する気持ちと一緒にですね。「船に乗る＝早くどこにでも行けて、自由になる」みたいな雰囲気描かれていて、ワクワク感が伝わってきます。

大阪は海に面し、瀬戸内海と太平洋とに通じています。瀬戸内の両岸諸国は生産力の高い豊かな土地で、大阪はそれら諸国と内海という回廊で結ばれています。

太平洋は諸外国との交易の窓口。戦国期に栄えた堺の南蛮貿易は有名です。海に面していること、これこそ豊かさが流れ込む第一条件でした。

この地の利にいち早く着目したのが織田信長です。それまでの戦国大名は守城のために山の上に城を築くのが常でしたが、大阪のような海に開けた土地に拠点を設けようとしたのは、信長が経済に明るい武将だったからです。

経済特区政策 ー歴代の為政者たちに保護されるー

武将として大阪にいち早く着目した信長、大阪市東部の上町台地を「日本一の地形なり！」と絶賛しました。前述の「海に近く川に恵まれ、物流の要所」という他に、上町台地の周囲には海外交易で豊かに栄え、鉄砲の産地でもあった堺も目と鼻の先。信長は上町台地＝大坂に城を築きたくて仕方なかったのです。

しかし、当時上町台地には石山本願寺がありました。そこで信長と本願寺教徒（一向一揆勢）たちが十一年にもわたって繰り広げた血みどろの戦いが石山合戦です。

結果は、朝廷の仲立ちで和平を結び、石山本願寺側が大阪から退いたといった、信長が辛くも「判定勝ち」したようなものでした。そしてそのわずか二年後に本能寺の変で信長は斃れるわけです。

もし信長が長生きしていたら、近世では大阪が政治と経済の両方の中心地となっていたことでしょう。

信長が果たせなかった大阪城の夢、それを実現したのは、言うに及びませんが、豊臣秀吉、です。

秀吉は信長の経済政策を踏襲して、大阪城を建て、市街を一大商都とする政策をどんどん推し進めました。平野や堺など大坂近郊から商人を大坂に移住させ、地子銀（住民税）を免除し、商いを奨励しました。この時期大阪の人口は20万人に増えたそうです。当時のことを思えば大都市ですね。

秀吉によって、「天下の台所」のシステム、すなわち諸国の物資を大阪に集めて市を立て、全国にそれを配分していくというシステムが初めて造られました。

続いて大阪を治めた徳川政権も大阪振興に寄与しています。大阪の繁栄について「大阪の人は太閤さんのおかげだと思いきるところがあります。むしろ家康以来、徳川三百年の保護のおかげと思ったほうがいい」と言ったのは、ご自身も大阪出身である司馬遼太郎さんです。

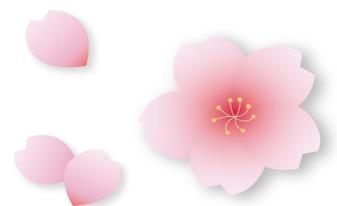
大坂の陣後の復興には、家康の外孫、松平忠明が大きく貢献しました。道頓堀川の命名以外にも、城には住まずに天満橋南詰めの屋敷に住んで、城よりも市街の再生を優先したという逸話が残っています。

大阪に対する敬意と思いやりを感じますね。

続いて大阪は幕府直轄地となり、時の二代将軍秀忠は大阪復興の仕上げとして、伏見町人の大阪への移住を命じました。裕福な伏見町人の手で開削されたのが京町堀川で、その名前に由来が見て取れます。

伏見町人は京町の他に、上町の伏見両替町、北船場の伏見町や呉服町、そして長堀心斎橋付近にも移住しました。心斎橋は今でも大阪みなみの繁華街、繁栄の中心地ですね。心斎橋を造った岡田心斎も伏見出身というのが今の定説です。

よって、第2のポイントは為政者たちが経済特区としてそれにふさわしい政策を大阪に対して行ってきた、ということです。



クリエイティブな町人たち ―自らの力と合理性で―

最後の第3のポイント、私はこれを特に強調したいと思います。それは大坂の街を自分たちの力で創り上げてきた町方＝民間の大いなる力です。

大坂の堀川や橋の多くが民間の資本で造られ維持されていました。

まず秀吉の奨励策によって移住してきた商人たちが、自らリスクをとって堀川の開削に挑みました。湿地帯であった大坂の街に堀川を掘り、水を流し、掘った土によって乾燥した造営地を造る。この造成地を売却することによって事業の資金を回収し、利益を得ていたのです。

その過程で、江戸堀川を掘った桔梗屋伍郎左衛門とその仲間たちは、大坂で初めての建設債権を発行しています。これはその後各地の城下町経済を支える藩札へとつながっていきます。このような土地開発の手法は現在のビジネスまったく一緒で、近代以降の合理性が既に宿っていると言えるでしょう。

もう一つ、ここで画期的なアイデアが生まれたとする説があります。

『大阪古地図むかし案内』（本渡章著）では、玉置豊次郎氏の以下のような説を紹介しています。「地揚げの土は池を掘って得られた。湿潤地では土地を深く掘れば、水が出て池ができる。このとき、各自が随所に池を掘ってばらばらに家を建てるのではなく、池を連続させて堀川とし、その揚げ土で両岸に盛土をして敷地としたのである。大規模は開発を無計画に行わず、整然とした街をつくるための合理的な考え方といえるだろう」

合理的な大阪の人々を見ていると、私はこの説を大いに支持しますし、当時の大坂人のクリエイティビティに深く感心します。

さらに、橋を維持するために大坂の町人たちが注ぎ込んできた努力には深く感心します。

それを知ることができる貴重な資料が、心齋橋筋菊屋町に残る、心齋橋や戎橋の付け替え工事に関する収支決算書や文書です。

以下、大阪市土木局に勤務されていて、大阪の橋に関する著作もある松村博氏の論説から、その概要を紹介します。

木造橋の寿命は長くて20年、その度に大規模な修復工事が必要でした。

橋が老朽化してくると、橋詰の四軒の家が集まり、付け替え工事の発議をします。工事の概算額を見積もり、費用を分担する橋近傍の町々の年寄たちが集まり工事を決め、町奉行の許可を得てのち、入札によって工事請負人を決定。工事期間は約一ヶ月強、かなり短期間で行われていました。竣工すると盛大な渡初めが行われ、ご祝儀も配られ、町の人々にとっておめでたい一日となっていたようです。

橋を新しくするのにかかっていた費用ですが、1802年の心齋橋の工事では銀20貫との記録があります。現在の価格に換算するのは難しいのですが、一つの試算では8000万円くらいとなっています。仮にこの数字を採用すると、8000万円を20町で負担し、さらに近隣に心齋橋以外の橋もあったわけですから、その負担は大変大きなものでした。20の町内会で8000万円、いやそれ以上を負担するのは、現在では考えられませんね。

大坂の場合、公儀橋でない町橋がほとんどで、幕府は一切お金を出しませんから、文字通り大坂は、町人による町人のための街だったのですね。

その重い負担の分担方法も、合理的でみなが納得のいく方法を考え、採用してきたことがうかがえます。心齋橋の場合、全工事費用の二分の一を橋詰の二つの町で負担し、残りを橋に近い町から順番に10%ずつ等比級数的に逡減しながら割り当てていました。菊屋町内部では各家に割り当てるには、町を南北に分けて、橋に近い北のほうが1割多く負担することにした上で、各家へは間口の広さに応じて割り当てを決めていました。きめ細やかな計算で、公平さを維持しようとしていたのですね。

このようにして大坂の橋々は300年の長きに渡り、民間の力によって支えられてきたのでした。時代が下がるにつれて町橋の管理状況が悪くなっていったそうですが、この重い財政負担を考えればやむを得なかったことと思われまふ。（『Chamber』大阪商工会議所 1986.6 浪華の名橋⑧心齋橋 松村博 より）

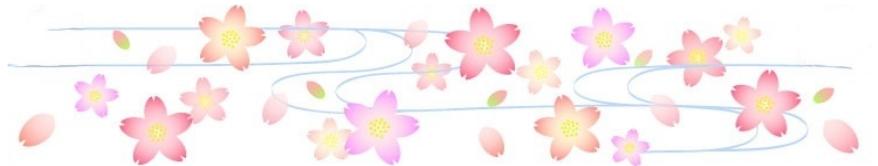
第2のポイントで、「江戸幕府も大坂を保護した」と述べましたが、実は保護せざるを得なかったとする見方もあります。

上記のように大坂の橋の維持を民間に任せ、その恩恵を受けていたのだから、代わりに地子銀の免除などの優遇策を取らざるを得なかったとも言えるのです。

また、幕府は当初大坂を江戸への物資中継地にし、中央市場はあくまで江戸に置くのが本音だったとする説もあります。ところが大坂の立地のよさ、水運の便のよさなど様々な要因から、幕府の思惑を超えて、大坂が「天下の台所」として発展したという見方です（渡邊忠司『近世「食い倒れ」考』）。

私は、それは大いにあり得ると賛同します。

しかしそれに付け加えたいのは、環境条件もさることながら、幕府が大坂の発展を許さざるを得なかったのは、秀吉時代以来自分たちの力でインフラを整備し、新しい街の仕組みを創造してきた民間の大いなる力があったからだと考えています。



最後に、四ツ橋跡が現在どのようなになっているかご紹介いたしましょう。



ご覧のとおり、ごくごく普通の交差点になっています。

交差点の名前と、この筋を通る地下鉄「四ツ橋線」にその名称のみが残され、後は何もなかったの街の一角になってしまったように見えますね。

それでも、ちゃんとあるんですよ、四つの橋の面影が。それは2か所あります。

一つ目は地下鉄四ツ橋線の四ツ橋駅ホームです。

ホームの壁に描かれた青い線と丸は何を表しているかお分かりになりますか？



ちょっと首を左に傾けてみると、「かみつな」と読めませんか？ そうなんです、写真は後ろが切れてしまっていますが、これは「かみつなぎばし」と描かれているのです。もちろん、「しもつなぎばし」「よしのやばし」「すみやばし」もありますよ。

四ツ橋駅ホームの壁にはかつての四つの橋の名前がこんな風に描かれているんです。四ツ橋をいつまでも忘れないようにしようという大阪人の心が伝わってくるではありませんか。

そしてもう一つ、地上に戻って、四ツ橋交差点の中央分離帯です。



このように四ツ橋の記念碑があり、しかも四つの橋のミニチュア版があるのです。当時の面影を偲ぶことができます。

碑に添えられた文章には、さりげなくそっと書かれています。

「（四ツ橋は）橋を愛する人々の心に生き続けている」

2012年10月

まんがもコラムも第2話に続きます。

《主な参考文献、資料》

「大坂大繪圖」（1696年、国立国会図書館蔵）

「日本永代蔵」井原西鶴著 堀切実訳（角川ソフィア文庫、2009年）

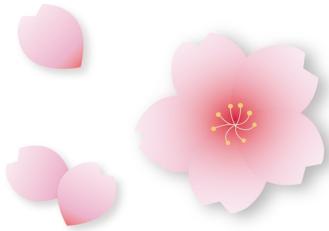
「豪商たちの時代 徳川三百年は『あきんど』が創った」脇本祐一著（日本経済新聞社、2006年）

「大阪のお勉強」前垣和義著（西日本出版社、2008年）

「大阪古地図むかし案内 読み解き大坂大絵図」本渡章著（創元社、2010年）

「Chamber 浪華の名橋⑧心斎橋」松村博著（大阪商工会議所 1986年）

「近世「食い倒れ」考」渡辺忠司著（東方出版、2002年） 「司馬遼太郎全講演[2] 大坂をつくった武将たち」司馬遼太郎（朝日文庫、2003年）



みずのみやこ大坂(1)

<http://p.booklog.jp/book/59246>

著者：新崎衣南未

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/inami-n/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/59246>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/59246>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ